

なびいメンバーさんよりご寄稿頂きました私小説です。30年前の体験を元に綴られたそうです。
『笑って頂ければ幸いです』筆者より

「タクシーを盗む」

—統合失調症、あるいは精神分裂病—

J.K

高3の六月に、このままじゃダメだと思った。内心を隠して、うわべだけ八方美人でやっているのが心底耐えられなくなった。表に出そう、嫌いな奴には嫌いと言おう。そうしようと思った。

友人からは、「J.K、最近怒りっぽくなったな。」と言われたが、気にならなかった。変わった気がした。自分的には充実していた。でも、勉強がどうでもよくなってしまった。

部活も終わり、パチンコにハマった。昼休みにも、駅前のパチンコ屋に行くようになった。当時は、羽ものが主流だったので、三千円くらいで遊べた。台の前で、タバコを吸いながら、夢中で玉を追っていた。

そうしているうちに、大学受験の季節がやってきた。相変わらず、勉強に身が入らなかった。それでも、共通一次の希望の欄には「東大」と書いた。当然、足切り。そのまま、周りに合わせて浪人生に。予備校はS台予備校へ高校の推薦で入った。文一αとβが選べたが、なんとなく、βの方にした。講義には出ていたが、勉強はしなかった。可愛い子もいたけど、きっかけがなかった。講義を聴いて時間を潰してタバコを吸う、それだけの一年だった。

今回は私大も受けた。W大とK大とA学院大。高校2年まで真面目にやったおかげで、A学院大仏文学部に受かった。勉強する気はなかった。サッカー部にも入ろうと思っていた。それからしばらくして、A学院大の経済学部の補欠合格の通知が届いた。勉強する気は、さらさらなかった。自分としては仏文に行きたかったのだけど、親父に「経済学部へ行け」と言われて、その通りにした。高3の六月からの俺なりの反抗が、いっぺんで全てが負けた。目の前の世界から色が消えた。

大学の入学式。周りの世界と透明な膜で隔てられている感覚だった。心、ここにあらず。現実にしっくり合っていなかった。自分でもおかしいと思ったので、梶ヶ谷のT病院分院の精神科を受診した。「大学受験で疲れたんでしょう。」ぐらいの診察で、精神安定剤を処方されたが、まったく効かなかった。

高校の友達が、テニスサークルになんかに入るのには恥ずかしいような雰囲気だったので、流れて体育会のサッカー部に入部した。しばらくして、練習試合が行われた。一年生がラインズマンをやることになった。6、7人でジャンケンをして、一発で俺一人が負けた。仕方なくラインズマンをやったが、スローインでオフサイドの判定をしてしまった。主審から、「お前、全然分かってないな。代われ。」

それ以降、みっともなく、練習に出られなくなった。自然消滅。相変わらず、勉強はする気なかった。何しに大学行ってるのか分からなくなった。そのうちに前期の試験。試験勉強できずに、前期試験を放棄した。後期、行っても意味ないと思い、ついに大学に行けなくなった。二十歳になると終わるような予感が何となくあったが、八月に二十歳になって本当に終わった。

入学当初以来のT病院分院の精神科。今回は、うつ状態と診断され、ドグマチールを処方された。ドグマチールは、てきめん効いた。復活。車の免許を取り、家の近くのコンビニでバイトを始めた。四月からは再び大学に行けるようになった。自動的に二学年になっていたが、調子に乗ってテニスサークルにも入った。薬に頼っていたし、勉強もやる気はしなかったが、そこそこの大学生活を送れるようになった。ただ、現実にしっくり合っていない感覚は、残っていた。

しばらく、そんな感じで過ごしていたが、ある時、急に、同じサークルで二学年女子のリホの存在が気になりだした。そこで、薬を飲んでるようじゃ、好きという資格もないように思えてきた。俺は薬をやめた。そこから、おかしくなっていく。

ある日の夜、リホの家に電話した。父親が出たのだが、そこで俺は「お宅の娘さんを愛しています。」なんて言葉を口にした。そして電話を切った。リホから、折り返し、電話があった。「明日、学食に来て。」

次の日、言われた通りに、昼休みに学食へ行った。リホが座っていた。周りの知らない男子学生二、三人にガードされている。リホが言った。「J.K、何か私に言うことある？」俺は言った。「何も無いです。」そして、その場を後にした。背後から、一学年のサヤカの声がした。「J.Kさんなんて、死んじゃえばいいのよ！」

校舎の脇のベンチに座っていた。同じサークルのヨコサワが隣に来て、「J.K、あきらめろよ。」と、その後も何か言って、俺を慰めようとしてくれた。俺はそこでヨコサワに安定剤でも背中に注射されるんじゃないかと思った。完全に妄想だ。「帰る。」と言って、その場を離れた。

いつも降りる駅の2、3個先の駅で降りて、牛井屋に入った。辺りは暗くなっていた。店の中では、サザンの「エロティカ・セブン」が流れていた。牛井並を注文し、「卵をのつけて。」と追加した。食べた後、店を出て、駅にもどる道すがら、タクシーがハザードランプを点けて停車しているのが目に入った。雷に打たれたかのように、その点滅に神の啓示を感じた。「あのタクシーで、逃げられるところまで逃げよう。」車に近づき、運転席側のドアに手をかけた。その瞬間、牛井屋からタクシーの運転手が、ものすごい形相で駆け寄ってきた。「ふざけんな！お前。売り上げ、盗もうとしただろ！ちょっと来い！」腕をつかまれて、助手席に押し込まれた。そのまま、近くの警察署に連れて行かれた。警察官数人に取り囲まれ、アルコール検査用の袋に息を吐くように言われた。俺が、毒でも吸わされるんじゃないかという妄想の中にと、警察官の一人が見透かしたように、「何も毒を吸わそうとしてるんじゃないよ。いいから、息を吐け。」

ブタ箱に入れられた。玉子丼が出された。腹は減っていなかったが、全部食べた。先客は二人ほどいた。寝ようとしたが、妙に頭が冴えて寝れなかった。週刊マンガ誌があったので、めくってみると、「ギャングラー自己中心派」が載っていた。知っているマンガだったので読んでみたが、頭が冴えてる割に持続できず、最後まで読まずにやめた。そこからは、あまり憶えていない。気がついてみると病院のベッドの上だった

T病院分院の六人部屋。タクシーの運転手には親父が頭を下げてくれて、何とか収まったようだ。ヨコサワが見舞いに来てくれた。退屈してるんじゃないかと気をつけてくれて、本を持ってきてくれた。ヘッセの「車輪の下」だった。ヨコサワが言った。「J.K、何か欲しいものあるか？」俺は、半分、薬で意識が朦朧としている中で言った。

「ありがとう。じゃあ、白のBMWを買って来てくれ。」

(終)